

ストラヴィンスキーの「ペトルーシュカ……」、ハイレベルのテクニック、強靱な精神力とハイテンションの持続、やりたかったコトの発現、蓄えてきたモノの注入。バレエとのコラボ、人形の動きの強調がプラス、不自然不連続、突拍子のないギクシャク感がオン。ピアノソロの第3曲「謝肉祭」、脇目も振らずパワフル懸命、鬼気迫る没我・迫真のパフォーマンス。アドレナリン全開、難関を蹴散らし驕進クリア、髪を振り乱して鬼気迫る迫力。神がかりフェイズへ移行、いわゆるゾーンに憑依、言葉を掛けるのも憚られるコンセントレーション、間違えることはなしとの根拠のない確信が心を過(よぎ)る。納得づくの高次ステップへの追い込み、シツチャカメツチャカのリズム・バトル、心配よそこに順次捌き切る。聴き慣れたメロディーを愉しむだけ、心地よい快感。

今日の演奏家の熱演、正々堂々のストレート勝負、熱気ムンムンののめり込み、達成の充実感がヒシヒシ。この作品は、私が最初に虜になった近現代モノ。聴き始めの頃(50年程前)、ポリニさんを知り、すぐにレコードを購入。研ぎ澄まされたクレバーさ、胸のすく様な演奏にショック、否応なしに平伏した思い出。同じ頃、ベロフさんのFMをエアチェック、来日中のコンチェルトでのアンコール(3曲とも)、素直で人懐っこいアプローチに魅了され、何度も繰り返し聴く、いつの間にか新しさへの抵抗感は霧散。ライブでは2人の機会に恵まれる。エルバシヤさん(15年前)、少し離れてからの俯瞰、ブリリアントの中に柔らかさ、深く滑らかな光沢、あたかもお公家さんの。ポゴレリッチさん(6年前)、好きな音に耽溺し何度も響かせる、突拍子のない不規則性、グロテスクでエキセントリック。

コロナ禍の影響でピアニストの演奏は久しぶり、3密回避のため大きなホール。響きなど空間感覚の確認、疑心暗鬼手探りの狼狽えの瞬間も。ラヴェルの「水の戯れ」で吹っ切れ、いつものペースを確りと確保、季節は夏かしら、噴水の中から周囲を見回す。澄み切った清峻さ、湧き上がるイキイキ躍動感、滴々たる粒の輝き、いろいろな表情を表現。「英雄ポロネーズ」、いつもに増して雄弁、前半のメインディッシュに相応たるスケールアップ。(2021.3.7)

<第1部>

ショパン：ワルツ 1番 変ホ長調 Op.18「華麗なる大円舞曲」

ベートーヴェン：ピアノソナタ 8番 ハ短調 Op.13

リスト：「パガニーニによる大練習曲」3番 嬰ハ短調「ラ・カンパネラ」

ラヴェル：水の戯れ

ショパン：ポロネーズ 6番 変イ長調 Op.53「英雄」

<第2部>

ストラヴィンスキー：ペトルーシュカからの3楽章 【バレエ】松岡 宏、大場蒔音
(アンコール)

リスト：リスト：3つの演奏会用練習曲 3番 変ニ長調 S144-3「ため息」

バルトーク：6つのルーマニア民族舞曲 Sz.56 から

「1 棒踊り」「2 帯踊り」「5 ルーマニア風ポルカ」「6 速い踊り」

ショパン：幻想即興曲 嬰ハ短調 Op.66

